

ロシアSF瓦版 「かぜのたより」 第3号

◇ルキヤネンコ「特別大使との夕暮れの会談」

SFマガジン2008年1月号に表題の短編が記載されている。大野典宏氏による解説も付されているが、翻訳を祝福して当紙でも紹介を続けよう。

ルキヤネンコの作品の邦訳は、長編としては、代表作であるウォッチ・シリーズの第1作「ナイト・ウォッチ」(1998)と第2作「デイ・ウォッチ」(2000。ウラジーミル・ワシリエフと共作。ともにバジリコ刊)があり、短編としては「未調理のフグ」がすでにある。ウォッチ・シリーズはあと2作残されているが、最終作の「ラスト・ウォッチ」«Последний дозор»(2005)はかなりの傑作との噂である。邦訳が楽しみである。

すでに邦訳された作品からもルキヤネンコ作品の特徴はうかがうことができるが、長編においては複雑な構成を見せる一方で、短編においては比較的ストレートな作風だと評されることもある。確かに今回邦訳された「特別大使との夕暮れの会談」もタメは利いているが、変にひねったところのないなかなかコクのある作品と言えよう。

ルキヤネンコはもともとファン上がりの作家で、カザフスタンの医師の家庭に育ち、アルマ=アタで精神医学を修めたのだが、早くからSFに目覚め、1988年からの2年間に8つの中編と40の短編を書いたという。

中編«Атомный сон»(1992)が1993年のスタート賞を受賞し、今回のSFマガジンの大野氏解説にも「四十島の騎士」として紹介のある長編«Рыцари Сорока Островов»(1992)がサント・ペテルブルグのテラ・ファンタスチカ社から刊行されて好評を博し、1994年から

専業作家となった。その後はヒロイックファンタジー、スペースオペラ、サイバーパンクなどさまざまな傾向の長編を精力的に次々と発表し、読者の強い支持を受けてベストセラー作家の地位を獲得した。

だが、このようなデビューのあり方はロシアSF界においては非常に幸運なものであったと言えよう。ルキヤネンコよりもひとつ古い世代に属するストリャロフ、ルイバコフ、ヴェレル、シテルンといった作家たちは、ソ連時代には発表するあてもないまま、自由に作品を送り出す時機が到来するのを待つて作品を書きためており、彼らにとっては書けない時代にどう書くかということが問題であった。デビューから20年たっても単著が出ない作家もいたのである。一方でソ連崩壊後は従来の出版システムが崩壊し、作家たちは市場主義という新しい状況のもとで作品を書かなければならなくなったが、このなかで書けなくなった作家も少なからずいた。また、紙幅に厳しい制限のあったソ連時代には中短編が中心であったのに対し、ソ連崩壊後の出版市場では長編が強く求められるようになった。このような状況に力強く対応したのがルキヤネンコであった。ここでは触れないが、ペレーヴインも同様に幸運な作家であった。

ルキヤネンコの魅力は多面的であろうが、筆者が好きなのは、現代のモスクワなどを舞台にした場面である。「ナイト・ウォッチ」の冒頭部でイゴールが尾行される場所はしっとりとした情感たっぷりのすばらしい場面で、モスクワにはファンタスチカがよく似合うぜ！と思ったものだ。一方、オスタンキノのテレビ塔を舞台にした大立ち回りはかなり派手だが彼の腕力を見せつけたよくてきた場面だと思う。

「特別大使との夕暮れの会談」の翌年に書かれ、2002年のインタープレスコン賞を受賞した短編「От судьбы」(2001)について紹介しておこう。飛行機恐怖症の主人公は、症状を克服するために「運命から逃れる」という怪しげな名前の団体の事務所を訪れ、依頼人にとっては耐えがたい不幸な運命を、まだ耐えられる範囲内の他人の不幸な運命と取り替えることで不運をやりすごすという慈善事業の説明を受ける。たとえば自分に愛人がいることを妻に知られるのが心配だという人がいる一方で、そんなことは平気だという人もおり、その間でそれぞれが深刻に感じるリスクを交換すれば、問題は解決するということなのだ。しかし、主人公は相手を詐欺師と疑い、激しいやり取りの末に話し合いは決裂する。

こうして、主人公は出張に行くためにモスクワのシェレメチェヴォ空港へ行かざるをえなくなるのだが、そこであるものを目撃したために思い直して団体の事務所へ戻ることになる。主人公が見たものは、8歳の身なりのよい物乞いの少女であった。つまり、彼女は貧しくもないのにプロの物乞いであったのである。そこに書かれている一行はこうだ。「そのとき世界は二つに裂けた」。それだけ。

これはなかなか書けない展開である。ここを読んだとき、筆者はルキヤネンコは本当に力のある作家だと確信し、これが彼の本領だと感じた。シェレメチェヴォ空港のあの薄暗い、落ち着かない空間を背景にしながら、自己の世界の分裂を描き、それを作品の展開の動力とする技量は非常に高いものだった。理詰めではなく、多少の飛躍を交えながら展開させた点が抜群にうまいところである。作品の出だしはまるで往年の日本SFのようだが、これも「特別大使との夕暮れの会談」と同じく、特に

ひねくりまわしているわけでもないのに、展開の妙がある。

さて、この少女を目撃して自分の世界が動揺したことがきっかけとなって事務所を再訪した主人公は、飛行機恐怖症の治療ではなく、自分の本当の願いを告白するのだが、それはあまりにもセンチメンタルで切実でもあるのでここでは書かないこととする。興味があれば、男の本当の願いを考えて筆者までお答えをお寄せください。それはさておき、この短編はロシアSFのアンソロジーなどを作る機会があればぜひ入れてみたい作品である。

◇ 編集後記

第3号をお届けします。筆者のもっとも近いところにいる読者からは、第1号は自分のようなロシアSFを知らない人の興味もひきつけるけれども、第2号はマニアックだったというたいへんにキビシイご意見をいただきました。でも、「特別大使との夕暮れの会談」は第2号で紹介した年鑑アンソロジー「ファンタスチカ」の第1集に掲載されたものであり、情報自体はそうマニアックでもないはずだと言いつつ訳します。

今回は巻き返しを図り、いま話題のこれではどうだとばかりに、ルキヤネンコを取り上げてみました。映画「デイ・ウォッチ」の公開も楽しみです。ご感想お待ちしております。

ひとりで書いてひとりで出しているのに編集後記とはいかなることかのご指摘もいただきました。当紙では皆さまのご寄稿もお待ちしておりますので、その点もよろしく願います。

ロシアSF 瓦版:かぜのたより

第3号 2007年12月1日発行

編集人 宮風耕治

e-Mail k-veter@dream.ocn.ne.jp